



TITLE:

<大會抄録>オスマン朝期カイロの 「死者の街」研究序説

AUTHOR(S):

大稔, 哲也

CITATION:

大稔, 哲也. <大會抄録>オスマン朝期カイロの「死者の街」研究序説. 東洋史研究 1996, 55(3): 628-629

ISSUE DATE:

1996-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155013>

RIGHT:

る。當然それによって、王權を支える勢力の基盤も變化し、新たな支持勢力も登場した。それと同時に新たに獲得した領域に對する支配が進行していく。

このように、それまでの地方が新たに中央として再生し、新たに生まれた地方に對して、それを支配する構造が生まれてくる。このような複合的な百濟國家の再編過程を、中央と地方の問題を意識しつつ、追究してみたい。

セレウケイアとテースイフオーン

——アルシャク朝パルティアとギリシア都市——

春 田 晴 郎

アルシャク朝パルティアの性格については、イラニズムの復興、という視點で語られることが多く、先行するセレウコス朝との關係では、連續性はあまり言及されなくなっている。

セレウコス朝の王都の一つであるティグリス河畔のセレウケイアとその對岸にアルシャク朝が建設したテースイフオーン(クテシフオン)との關係でも、ブリニウスやタキトウスなどの記述に強く影響されて、兩都市をギリシア都市とそれに對抗する王朝の都市、と對立させて記述されていたりする。これは、ギリシア(ヘレニズム)文化を對立的に捉えることで、パルティアにおける前者の吸収攝取という側面を輕視することにも繋がる。

本發表では、アルシャク朝時代におけるセレウケイア——テース

イフオーンの歴史を、セレウケイアやバビロン出土の史料から検討する。そして、兩都市は全く分離したものではなく「複合都市」としての性格も持つこと、アルシャク朝とギリシア都市との關係は紀元後一世紀に變化はするがその前後とも必ずしも兩者は對立してはいないこと、を確認し、この王朝の「セレウコス朝の繼承者」としての側面も重視する必要がある、という説を支持する。

オスマン朝期カイロの「死者の街」研究序説

大 稔 哲 也

近年、筆者は西暦一二一五世紀のエジプト「死者の街」において、集團による參詣行為が爆發的流行をみたことを掘り起こさんと努めてきた。しかし、それに引き續くオスマン朝支配下の死者の街の實態については、ほとんど研究も見當たらな。さらにそれがいつ衰微を呈し、現在のように聖者生誕祭の隆盛へと移行していったのかについては、まったく今後の研究に託されていると言えよう。

そこで、今回、オスマン朝期の死者の街を考える上で不可欠の史料となるであろうシニファイビー(Muhammad b. Shu'ayb b. Muhammad b. Badr al-Din b. Ahmad 'Ali al-Hijazi al-Shu'aybi)の參詣の書 *Kitāb yashūmīl 'alā Dhīr man dafina bi-Mīsr al-Qahirā min al-Muhaddathīn wa-al-Awliyā' wa-al-Salīhīn min al-Rijāl wa-al-Nisā'* をおもに取り上げて検討する。本書はカイロ・アズハル圖書館にその寫本が存在することを、その目録か

らY・ラーギブがかつて指摘していたのみで、管見の限りまったく他研究に言及されていない。報告では本寫本に他史料を併せて考察し、同期における死者の街参詣の在り方、そして死者の街自體の研究序説としたい。

「地方史・誌」にみる國民國家イラン における中央・地方關係

——アゼルバイジャンの事例を中心に——

八尾師 誠

中東地域の近現代史にとって基本的問題のひとつに國民國家の形成と發展がある。イランの場合も例外ではない。一九世紀以來、好むと好まざるとに拘らず、國民國家への道に足を踏み入れたイランは二〇世紀初頭に經驗する「立憲革命」を機に、明確に國民國家としての自己主張を始める。以後、一貫して中央集權化政策がとられ、國民經濟の形成と發展がはかられ、國家（國民）統合が推し進められてきた。一九二五年に成立したバフラヴィー王朝體制下にあつても、一九七九年に誕生したイスラーム共和國政權下にあつても、この基本的方向性は變わっていない。

その結果、それまでは政治的・經濟的・社會的・文化的に一定の獨自性と自立性を保持してきたイラン・ザミーンの各地域が、テヘランという「中央」に對する「地方」として位置附けられ、「中央」によつて統合され、支配される對象に組み込まれることとなつた。

そこに生まれた「中央・地方」關係の諸相を、「地方史・誌」を史料（資料）に検討することが今回のねらいである。方法的には、出版狀況（出版年、出版地、出版主體など）や各「地方史・誌」がどのような範圍を「地方」として設定しているか、といったいわゆる外在的分析と、内容そのものに關わる内在的分析があるが、今回は、アゼルバイジャンを具體的事例として、特に外在的分析を中心に豫備的考察を行なうつもりである。

宋代における祠廟と社

——その性格をめぐる議論と史料の再検討——

松本浩一

宋代は社や祠廟信仰の歴史においても大きな轉換點とされ、從來から様々な變化が指摘されてきている。たとえば傳統的な里社とは異質とされる祠廟が、特に江南の地域において簇生し、その祭祀組織も新しいタイプのものが現れたことなどである。しかしこの時代の社あるいは新しくあらわれた祠廟信仰が、どのような組織を備え、どのような活動を行っていたのか、またいわゆる傳統的な社の信仰とは、どのような點で異なっていたのかについて、具體的なイメージは描かれてこない。

この時代の史料において、社という言葉で表現される對象は様々であり、宗教的なものだけに限定してみても、あるいは神を祀つた施設であつたり、そこで行われる祭祀活動であつたり、祭祀に關わ